第1章 1912-1923［大正元年］［大正12年］

創意工夫の才を発揮し創業 シャープペンシルで事業拡大

早川式繰出鉛筆（シャープペンシル）が、
創業者・早川徳次によって生み出されたのは1915年のこと。
金属加工の徒弟奉公を経て、1912年に東京の下町に起業した創業者が、
苦心の末に作り上げたものである。
社名の由来ともなるシャープペンシルは、機能性と美しさからヒット。
当時の大正モダンの気風にもマッチして、事業は隆盛を極めた。
使う人のことを誠実に考え、創意工夫で便利さや品質を追求する姿勢は、
このときより当社の基本となっていた。

シャープペンシルの米国特許図面

1 早川徳次、東京本所で創業

創業者の生い立ちと錺屋（かざり）への奉公

シャープ株式会社は、1912（大正元）年9月15日、創業者早川徳次が金属加工業を開業したことに始まる。その前史として、起業に至る創業者の足跡をたどってみる。

早川徳次は、1893（明治26）年11月3日、東京市日本橋区久松町42番地（現・東京都中央区）に父政吉（まさきち）、母花子の末子として生まれた。

母が仕事で多忙な上、病弱でもあったため、生後1年11か月で肥料屋の出野（での）家に預けられ、やがて正式に養子となる。継養母に辛く当たられ、食事も十分与えられないほどの過酷な幼少期を過ごす。小学2年に進級して間もなく学校をやめさせられ、朝から深夜まで内職のマッチ箱のラベル貼りだけの生活となった。

この養家でのひどい日々を知った、近所に住む盲目の婦人井上さんの世話で、8歳を前に徳次は、錺屋（かざり）（金属細工業）に奉公することになった。このときの大きな感謝の気持ちはいつまでもとぎれず、後に盲目の人たちへの支援につながる。

長い徒弟奉公は、その人生において重要な学びの場となり、実業家としての原点となった。主人の坂田芳松（さかたよしまつ）氏は昔気質（かたぎ）の職人肌の人で、仕事には厳しいが情に厚い。ここで、金属を加工する技術の基礎を仕込んでもらうとともに、人の世の情についても教わった。

徒弟時代、仲間とともに（前列右端が早川創業者）

主人は新しく鉛筆製造の事業を始めるが技術の未熟さから失敗し、大量の鉛筆がキズ物となる。職人たちが主人のもとを去っていく中、徳次はキズ物の鉛筆を夜店ですべて売り切った。売るための情熱と売れる条件さえ備えれば物は売れることを会得し、顧客の心理をつかむ商売のコツを覚えた。これが、後に実業家として大いに役立つことになる。

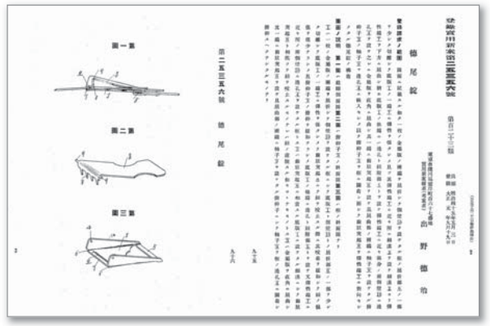
ベルトのバックル「徳尾錠（とくびじょう）」の考案

1909年4月、7年7か月にわたる年季奉公を勤め上げた。そして1年間のお礼奉公も終え、一人前の錺職人になった。

職人となった徳次は、まず自分の考案した製品の製造に活かすため、金属曲げや成形などに使うプレス機を、普通のものと小型サイズの2台購入した。さらに、主人が断ろうとした水道自在器※1の付属金具の製作など、新しい仕事にも挑戦した。

ある日、活動写真（映画）を見ていた徳次は、登場人物のベルトのだらしなさが気になり、これをきっかけに、ベルトに穴がなくてもきっちり締められるバックルを考案。

徳尾錠。穴を開けないでベルトを締める、これまでにない新しいバックル



徳尾錠の実用新案 第25356号（1912年9月19日登録）
（注）創業者は1915年に出野家より離籍して早川姓に復帰。また徳次の字が徳治と誤った字での登録となっている

自分の名前から1字を取って「徳尾錠」と名付け、本人初の実用新案を取得した。知人の紹介で徳尾錠の大量注文を受け、次第に独立への思いを強くしていった。

金属加工業として創業

1912年9月15日、徳次は19歳を前にして念願の独立を果たした。東京市本所区松井町1丁目30番地（現・東京都江東区新大橋）に小さな民家を借り、職人と見習いの計2人とで金属加工業を開業したのである。開業資金は50円で、6畳一間きりの小さい仕事場であったが、道具類の配置を工夫するなど、能率を上げる方法を取り入れた。

創業の地は東京の下町、本所区松井町（現・江東区新大橋）であった

独立当初は徳尾錠の製作が中心であったが、新製品の研究にも熱心に取り組んだ。その一つが、水道自在器である。取り付け部品を9個からわずか3個にして取り付けを簡単にすることを考案。従来は30分かかった取り付け時間を1分で済むようにし、徳尾錠に続き、2度目の新案特許を取得した。

徳次は一つの成功に満足することなく、創意工夫を発揮して、新しい製品を次々と生み出していったのである。1914年、結婚と同時に住宅兼仕事場を本所区林町2丁目35番地（現・墨田区立川）に移転する。従業員も7人に増やし、200円余り※2の大金を投じて1馬力のモーターを設置。この時代、思い切った投資であった。

同業者はまだ手作業の時代、「先んずれば人を制す」とばかり、機械による作業効率化を図った。徳次は、無類の機械好きとして同業者に知れわたることになる。

※1 水道自在器…水栓の先につけて、蛇口を自由な方向に向ける器具
※2『私と事業（早川徳次著）』に、徳次が職人となった1910年ごろの話として「普通仲間は12円くらいが1か月の稼ぎの相場であった」と記載されている。モーターの代金はその15倍以上になる

2 シャープペンシルの誕生

早川式繰出鉛筆の完成

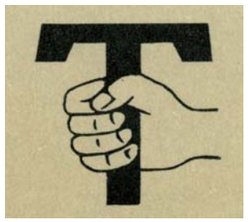
■ 使いやすく丈夫で、しかも美しい筆記具の誕生

1915（大正4）年、早川は、大手文具製造店から繰出鉛筆の金具を大量に受注した。この繰出鉛筆はシャープペンシルの前身ともいえるもので、セルロイド製の太い不細工な形で、しかも壊れやすい、いわば高級玩具のようなものだった。その内部の金具の製作を請け負ったのだが、繰出鉛筆の構造そのものが未熟だったため「買う人のために改良し、万年筆なみの実用品になれば事業としても期待できる」と考えた。

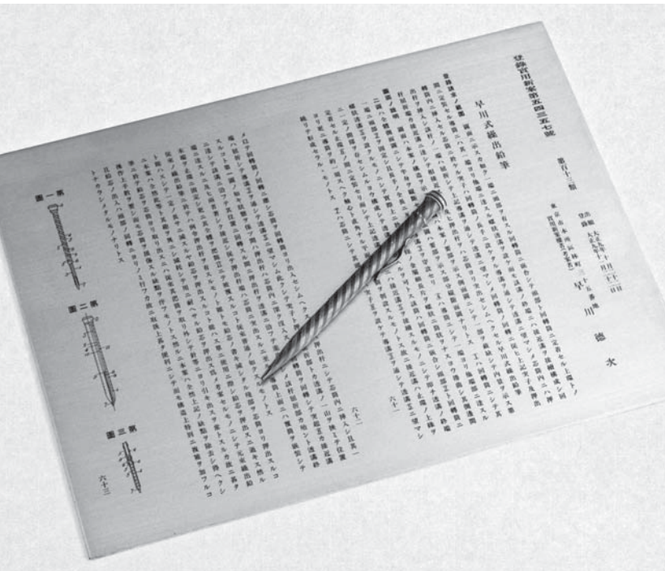
それ以来、通常の仕事は職人たちに任せ、早川は文字どおり寝食を忘れて繰出鉛筆の改良に没頭した。そしてついに、多くの部品を組み合わせていた内部の金具を、真鍮の1枚板を使って作り替え、丈夫な部品にすることに成功する。次に、この真鍮の部品を先端にいくほど細く絞ったパイプ状にし、内側に芯の通る細い溝を切り、心棒が滑らかに通って芯を押し出す構造を完成させた。さらに、軸を逆回転させると芯が収まる仕組みも考えた。内部を完成させると、外側をセルロイドではなく、ニッケルメッキを施した美しい金属軸にした。

こうして、使いやすく丈夫なだけでなく、見た目にも美しい「早川式繰出鉛筆」が完成したのである。

その頃、早川は幼いときに生き別れた兄政治と再会を果たしていた。兄は営業や経理に優れた手腕があり、雑貨商を営んでいた。兄に金属繰出鉛筆を見せると、新しい事業として十分に期待できると同意してくれた。そして早川兄弟商会金属文具製作所を設立。協力して金属繰出鉛筆を販売することになった。他の金属加工の仕事も続けながら、月産10グロス（約1,400本）からのスタートである。



名前の頭文字のTの字を右手で握り「自力で自らの仕事を支えている」ということを表すマークを商標とした



精巧な構造が評価され、国内外で48件もの新案特許を取得した

■ 世に認められるまでの苦労

二人は手分けして文具問屋を回ったが、当初はどの店も批判的で、興味を示さなかった。和服には合わない。金属製の軸は冬には冷たく感じる。そんなことを行く先々で言われたが、何度断られても二人は諦めなかった。

製品に自信があったので、日本一の文具店といわれていた銀座の伊東屋にも商談を働きかけた。しかし、一流店の製品を見る目は厳しかった。指摘されるまま改良を繰り返し、最後には合計36種類もの見本が出来上がった。やがて伊東屋の主人にも金属繰出鉛筆を認められ、受注を得ることができるのだが、このときに助言を素直に受け止め、数多くの見本を作ったことが、その後の繰出鉛筆の改良に大いに役立ったのである。

金属繰出鉛筆の販売を始めて3か月が過ぎた頃、朗報が舞い込んだ。金属繰出鉛筆の見本を送っておいた横浜の貿易商館*から、輸出用に引き合いがあったのだ。1914年に勃発した第1次世界大戦の影響で、欧米各地で愛用されていたドイツ製の金属繰出鉛筆が入手困難になり、ドイツ製のものにひけをとらない早川式繰出鉛筆に白羽の矢が立ったようである。さっそく工場を挙げて製作に取りかかった。他の仕事を一時中止し、さらに深夜まで働いても追いつかないほどだった。

カレンダーやはさみ、方位磁石のついたものなど、さまざまなシャープペンシルを生み出していった

欧米への輸出が軌道に乗るにつれ、海外での高い評価が国内にも伝わった。そして伊東屋などの文具店や、百貨店からも受注が殺到するようになった。

製品改良と販路の拡大

早川式繰出鉛筆は圧倒的な人気を得たが、早川は現状に満足せず、さらに精巧な製品の開発に挑戦した。1916年、米国製のドリルを使い、極めて小さい穴の金属製パイプを作ることに成功。これにより超極細の鉛筆の芯の使用が可能になり、金属軸の長さや太さにも工夫を加え、新たな金属繰出鉛筆を完成させたのだった。

販売に際しては、代理店制度を採用し、中部地方は名古屋の安藤玉華堂と、関東地方は日本文具製造株式会社東京支社と契約し、販売を委託した。

新製品の名として「シャープ・ペンシル」を考えていたところ、関西総代理店の福井商店（現・株式会社ライオン事務器）の福井正太郎氏（後の5代目 福井庄次郎氏）から「エバー・レディ・シャープ・ペンシル」の名称を勧められた。日本語に訳すと「常備芯尖鉛筆」となる。「綴りは違うが、レディには婦人という意味もある。外国の婦人が愛用しているということで、広告価値が上がりますよ」ということで、これを受け入れ、商標として登録した。後に、最初に考えた「シャープ・ペンシル」と呼び慣わすことになり、国内の金属繰出鉛筆の代名詞となった。

エバー・レディ・シャープ・ペンシルが誕生した後も、早川は改良や工夫をかさね、手ごろな価格の普及品から金銀製の高級品まで、また、時計付きやライター付きなど、さまざまな製品を世に送り出し、幅広く愛用された。

1921年の皇太子殿下（後の昭和天皇）の渡欧を祝い、14金製のシャープペンシルを献上している。また、1922年に上野公園で開催された平和記念東京博覧会に出品し、金牌を受けるなど、シャープペンシルの品位、品質に対する評価はいっそう高まっていった。

平和記念東京博覧会でシャープペンシルは金牌を受賞した

※ 貿易商館…外国商人の在外営業所。代理人または委託売買人などを駐在させた

3 順風満帆だった事業が一転

合理的な生産方式で増産

■ **高性能な機械類を積極的に導入**

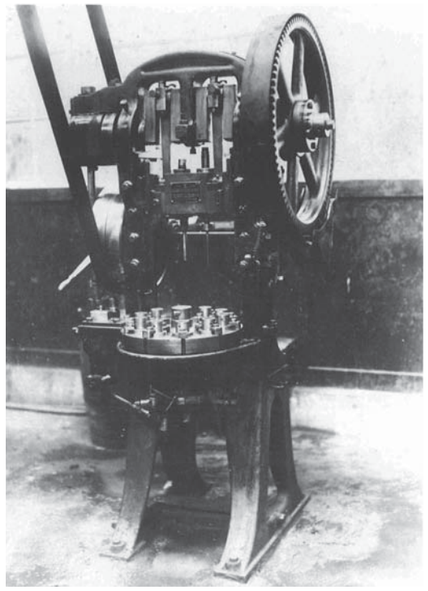
早川兄弟商会の工場では、高品質の製品を熟練の職人でなくとも安定して効率良くつくれる、流れ作業による生産方式を整え、シャープペンシルの増産を図った。

1919（大正8）年には林町の工場付近の土地を買収して、工場120坪（約400㎡）と事務所24坪（約80㎡）を新築。機械の効用を重視していた早川は、高性能な機械の導入に力を注ぎ、それまでの利益の大半をこの工場の設備類の購入に充てた。必要があれば、代理店を通じてスイスや英国から外国製機械を購入した。シャープペンシルの内部金具で、接合部品だったものを、頑丈な一体部品にできたのは、輸入したプレス機械によるところが大きかった。

「自社の商品には責任を持て」というのを信条としていた。たとえば、メッキは材料別の実験を繰り返し、「絶対にはげない」と断言できるほど耐久性の高い製品を完成させ、その上で初めて10年間の保証を付けている。

■ **新工場を建設、従業員は合計200人に**

お客様に支持される商品を合理的に生産し、仕入先や販売先を大切にする経営姿勢を貫いたことで事業は繁栄し、規模が飛躍的に拡大した。1920年、押上（現・墨田区八広（やひろ））に分工場を創設し、翌年には亀戸（現・江東区亀戸）に3か所目の工場用地250坪（約830㎡）を購入している。



輸入品のプレス機械。生産の効率化や品質の向上に貢献した

1923年には、林町の工場は300坪（約990㎡）まで拡張され、従業員200人、売上月額5万円と、業績は好調に推移していた。

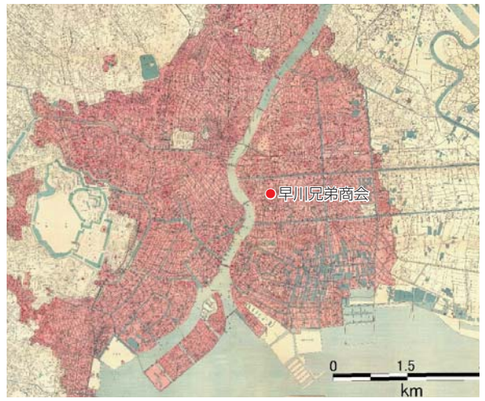
シャープペンシルの事業が成長した要因は、自らの製品に自信を持ち、その良さを理解してもらうまで粘り強く営業活動を行ったことや、常に品質と生産方式に改良を重ね、実用性と装飾性を兼ねた優れた製品を世に送り出すことができたからであろう。

シャープペンシル工場は効率的な流れ作業を採用した

大震災が関東地方を襲い、家族と工場を失う

1923年9月1日午前11時58分、相模湾を震源地としたマグニチュード7.9の大地震が、関東地方を襲った。友人宅を訪ねていた早川は、従業員や家族を心配し、工場へ戻った。この時点では、幸い工場も自宅も大きな被害はなく、従業員も家族も無事であった。そのうち、工場の中に被災者が続々と来て、人であふれた。

しかし、地震発生が昼食の準備時間だったことが災いし、町のあちこちから火の手が上がりはじめ、事態は急を告げた。もはや工場も類焼をまぬがれないと判断した早川は、従業員に米や金を分配し、他へ避難させることにした。同じように、集まってきた被災者にも食料品などを差し出した。岩崎別邸（現・江東区・清澄（きよすみ）庭園）が安全と思われたので、妻と二人の子どもを従業員に託して、先に向かわせ、自分は工場の後始末を済ませ、あとを追った。しかし、途中で町は火の海となり、死に物狂いで道を急ぎ、幾度も川に飛び込むなど、ようやく岩崎別邸へとたどり着いた。その避難先で知らされたのは二人の子の死であった。さらに、全身にやけどを負っていた妻も、後に亡くなってしまう。心のよりどころである、家族を失ってしまったのである。



関東大震災の震災地図（東京市火災動態地図）赤色が焼失した場所

九死に一生を得た早川は、従業員とともに避難生活を始める。震災から数日後、火災を免れた亀戸の長屋へ移った。以前購入していた5軒長屋であるが、罹災した工場の従業員70人ほどが集まり、夜露をしのいだ。

政府や各種団体がさまざまな救護支援策を実施していたが、早川はこれを受けることなく、自力で罹災従業員の面倒を見続けた。

少し事態が落ち着くと、林町の焼けた工場の機械類に、油を引いて錆び止めの手入れなどを行い、設備の保全にも取り組んだ。

余震と火の手に大混乱の東京市本所区石原町付近（朝日新聞社提供）

震災後の対応に奔走

早川は、事業の復興に奔走したが、めどは立たなかった。10月に入ると、関東方面でシャープペンシルの販売を委託していた日本文具製造から、「特約契約金と融資金合計2万円」の返済要求があった。高額かつ性急な内容であったが、兄と相談し、負債処理のためにやむなく早川兄弟商会を解散し、これまでの事業を日本文具製造に譲渡し、借財を弁済する、という結論に達した。

11月初旬、大阪の日本文具製造本社を訪れ、同社社長と、親会社である中山太陽堂の中山太一社長に面会し、話し合いで円満解決をみた。条件は、①早川兄弟商会は、機械類を日本文具製造に譲り渡し、同時にシャープペンシルに関する特許を無償で使用させる。②日本文具製造は、買掛金を支払い、シャープペンシル事業を継承するために早川兄弟商会の主な技術者を雇う。③技術指導のため早川を6か月間技師長として迎える、という内容であった。

震災の痛手から立ち直ろうとしていた早川に、たびたび困難が立ちはだかった。しかし、それにも決してくじけることはなかった。